

川谷 茂樹（哲学）

「定言命法」とは何か？ -Why be moral?とカント倫理学-

本論文は、『人倫の形而上学の基礎づけ』（以下『基礎づけ』と略記）と『実践理性批判』におけるカントの倫理思想の意義を、「なぜ我々は道徳に従わなければならないのか、なぜ悪いことをしてはいけないのか」という道徳の存在論的問題との関連から、解明しようとするものである。言い換えれば、道徳の存在理由とは何かという問いを道徳についての根本問題として見据えながら、その存在理由と道徳の本質規定との関わりという問題を考察している。本論文は、この問題を、以下の七章からの構成によって展開する。

論文全体は、道徳の本質に関わる第一章から第六章と、道徳の存在理由に関わる第七章の二つの部分に大別されるが、そのうち、第一・第二章では、定言命法というカント倫理学の核心的思想を提示するに至る予備的段階をテキストに沿いながら鋭く分析し、第三・第四章では、定言命法という概念そのものの内在的構造を俎上に載せ、第五・第六章では、定言命法の内容をさらに深めるために、そのいくつかの法式について詳論する。

第一章では、『基礎づけ』全三章のうち、カント倫理学の出発点をなしている第一章に焦点を絞り、カント倫理学のうちに、法則主義=外在主義と内在主義という二側面を見届ける。第二章では、『基礎づけ』第二章が検討され、道徳ニヒリズムやカント倫理学の意識内在主義的解釈の誤りを指摘し、内在主義についてのさらなる議論が展開される。

第三章では、定言命法と仮言命法の区別の根拠を、従来の解釈に見られるように、客観的か主観的かの区別に求めることができないことを示すことによって、自己愛の原理や技術的命法とは異なる定言命法の固有性を照射し、それと同時に、カント倫理学を法則主義=外在主義として一面的に解釈することの限界を明らかにする。第四章は、定言命法についての内在主義的解釈を具体的に展開し、そのために、太宰治の『走れメロス』と原始仏教の経典中の「諸悪莫作」という言葉に対する道元の解釈などを取り上げる。

第五章では、定言命法の法式のうちに再び外在主義を見届け、法則倫理学としてのカント倫理学の全体像を描き出し、そのうえで、第六章では、カントの法則概念そのものの難点を明示して、定言命法というカントの倫理思想のうちに、外在主義と内在主義という二側面が存することを明らかにする。

第七章では、第六章までの、道徳の本質についての考察を踏まえながら、道徳の存在についてのカントの立場を『実践理性批判』の「理性の事実」という思想の内に見届け、そこに内在主義的解釈の可能性を見出している。

本論文は、カントの批判期の倫理学書を取り上げ、テキスト読解を厳密に遂行しながら、同時に、形式主義とか厳格主義というカント倫理学に対する伝統的な批判的解釈をも十分に視野に入れ、そのうえでカント倫理学の存在論的側面を説得的に展開している。従来のカント研究においては、カント倫理学の本質についての解釈が主流であり、本論文のように、存在論的視点から考察する解釈は少なかった。本論文は、今後のカント研究やさらには倫理学研究に対して、考察に値するいくつかの論点を提示している点において、高い評価を与えることのできる哲学論文だと言える。

以上のことから、本調査委員会は、本論文の提出者が博士(文学)の学位を授与されるに十分であると認める。